
金子光晴
吉田一穂
村野四郎
草野心平

昭和43年9月5日初版印刷

昭和43年9月15日初版発行

発行者 山越 豊

本文装版印刷 三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷 東京プロセス株式会社
色刷口絵写真印刷 凸版印刷株式会社
本文用紙 三菱製紙株式会社
クロス 日本クロス工業株式会社
製函 加藤製函印刷株式会社
函ボール 佐賀板紙株式会社
製本 小泉製本株式会社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話(561)5921(代) 振替東京34

目次

金子光晴

こがね虫

水の流浪

鮫

女たちへのエレジ

落下傘

蛾

鬼の児の唄

えなの唄

9

18

23

39

46

64

81

85

非情

91

若葉のうた

99

吉田一穂

海の聖母

105

故園の書

147

稗子伝

168

未来者

179

吉田一穂詩集

189

村野四郎

体操詩集

199

抒情飛行

209

珊瑚の鞭

219

予感

227

実在の岸辺

231

抽象の城

247

亡羊記

254

蒼白な紀行

279

草野心平

第百階級

293

マンモスの牙	368
第四の蛙	360
天	353
牡丹園	345
日本沙漠	336
富士山	331
絶景	319
蛙	313
母岩	306
明日は天気だ	298

詩人の肖像

鑑賞

年譜

カット

堀田善衛

伊藤信吉

田川憲

亀山巖

吉田一穂

北園克衛

川路柳虹

真鍋博

吉岡堅二

庫田發

三岸節子

草野心平

海老原喜之助

金子光晴

こがね虫

三 月

ああ 三月が近づいた。

金晴きんばれの曙あけぼのの空は、

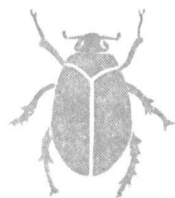
紅色べにいろの樹林じゆりんは夢見つつ唄ふ。

緑樹りよくじゆの季節が近づいた。

草叢くさむらに鈴蘭すずらんの揺れる日は近付いた。

空気が花花ちふんの膩粉もつやくと没薬もつやくに咽び、

五官を持つ者の歌ひ、且かつ歎く時は近づいた。



『こがね虫』は大正十二年七月刊行された。収録作品二十四篇。巻頭に「自序」、巻末に吉田一穂、佐藤惣之助の「跋文」がある。

金子光晴の第一詩集は、本名の金子保和たけちの名で大正八年一月刊行した『赤土の家』だが、一般には『こがね虫』によって、その最初の詩的位置を得たと見られている。

これについては金子光晴自身が「無自覚な作品をひろいあつめて詩集にまとめ、『赤土の家』と名づけて、自費出版した」(『詩人』)と言ひ、また『こがね虫』を出した僕は、佐藤(注・惣之助)の言つた通り、その三人とくびすを接することになった」(『詩人』)と言っている。「三人」というのは、当時の力量ある新進詩人とされた北村初雄、前田春声、福田正

少平の物思ひの日は近づいた。

ああ此身の記念の三月、美しい三月。

○

ああ、三月が近づいた。

小川は萌黄の初草に、金紗の陽炎を投あげる。

野山は高貴な衣裳に引映え、

村落は檳榔、小米桜に朧めく。

海岸に沿ふ波浪は狂噪に勞れ、薔薇色に眠り、

若者らが、渚に瞳を落し、

渺かに、散策し彷徨ふ頃は近付いた。

黄金より浪費する刻々は近づいた。

夫のことで、これらの詩人と肩を並べて登場したのである。

金子光晴の詩的意識や詩風は、『こがね虫』とそれ以後とでは一変している。もちろんその情操には底の方で脈絡するところがあるわけだが、少くともその美意識は激変した。次に『こがね虫』の「自序」の一部分を収録する。

「(まことに、夢見るために夢見る者のみが、『真実の夢想家』であらう。

およそ、過去の所有する栄華は、人々を、『生の無心』から紛れさせ、落魄への、はなやかな、痛恨多い経路をたどらせる。

『追憶』は、その廃宮廊である。)

かかる愛慕と、長い徘徊から、余は、ますます冷酷と、倦怠を撫育したが、すべての楽しからざる

悲哀が、生涯の扉に、

美しい金銀を打つ日は近づいた。

夜夜の寝苦しい頃は近づいた。

摘草に絵燈籠、花祭に、

一生に只一度の、

奇しき馴染の日は近付いた。

此世の蠱惑も、悲も、欣求も、

なべて美き韻律の頃は近づいた。

ああ、恋の三月、偽慢の三月。

私たちが書籍を机に伏せ、

何もかも忘れて酔ふ時は近づいた。

現存から、『詩歌』だけは、この後も、余を代償する任命を荷うてくれるだろうと信ずる。

何故ならば、余の、『崇高さ』や、『鮮新さ』に対する強い憧憬は、余の驕奢は、余の哀戚は、また、真実を希求める人間性は、『詩歌』の世界にのみ絶対無障礙であるからである。

これ故に、深い『憂愁』にまで、余を知解する事は、いかなる困難い友情であらう。

余の秘愛『こがね虫』一卷こそは、余が生命もて賭した贅沢な遊戯である。倡優の如く余は、『都雅』を精神とし、願わくば、艶白粉、胭脂の屍體となろうものを……」

「三月」全篇が華麗である。三月近いころの季節の明るさを、皮

二十五歳

振子は二十五歳の時刻を刻む。

夫は若さそれと熱禱いのりの狂乱ものぐるひの刻ときを刻む。

夫は碧天あをぞらの依的児エーデルの波動を乱打する。

夫は池水や青葦あをよしの間を輝き移動してゆく。

虹彩や夢の甘い擾乱さうらんが涉わたつてゆく。

鐘楼や、森が、時計台が、油画の如く現れてくる。

夫は二十五歳の万象風景がいふの凱歌である。

二

私の鏡には二十五歳の顔容かんはせが陥没してゐる。

膚の感触で表現し、それに色彩をほどこしたような、感覚と官能の美に息づいている作品である。

第一章の素材になつてゐるのは曙の空、樹林、緑樹、鈴蘭、花々などである。すべてありふれたものだけれども、それを「金晴の曙の空」といい、「紅色の樹林」という時、それらの素材が、春三月の光彩のように、血液を暖める気温のように、明るい霽開ふゆひら気とその喜びを醸かきし出す。

第二章も方法は同じである。

「萌黄の初草」「金紗の陽炎」など、形容そのものが華麗である。これは詩における美の新しいパターンというべきだった。

そしてまたこの美のパターンには、「黄金より浪費する」というような、命の祝祭が含まれている。おそらくこの情感にこめられた「時間」的なのは、「春宵一刻直千金」の情念と別のものではない。

二十五歳の哄笑^{たわわらひ}や、歡喜^{よろこび}や、情熱が反映してゐる。

二十五歳の双頬^{さうけほ}は朱粉に熾^もえてゐる。

二十五歳の眸子^{ひとみ}は月石の如く潤^{うる}んでゐる。

ああ、二十五歳の櫚林^{くぬぎばやし}や、荊棘^{いばら}牆^{がき}や、円屋頂^{ドーム}や、電柱は其背後^{その}を推移してゆく。

二十五歳の微風^{じふし}や、十姉妹^{まつ}の管絃樂が続いてゐる。

空気も、薔薇色の雲も、

あの深邃^{しんす}な場所にある見えざる天界も二十五歳である。

山嶺^{さんりん}は二十五歳の影をそんなに希望多く囲む。

海は私の前に新鮮な霧を引裂く。

二十五歳の糸雨^{こさめ}は物憂^{もののう}く匂やかである。

さらに「悲哀が、生涯の扉に／美しい金銀を打つ」という青春の情熱とその悲哀も、本質的には「時は過ぎゆく春よりぞ」（島崎藤村）と別のものではない。ただその情感がいかにも新しかった。島崎藤村は明治新体詩の年代に、生命的な暖かさにあふれる美のパターンを創成したが、金子光晴はそれをいっそう華麗にし、近代人の感覚と意匠で新鮮な詩的世界を開いたのである。

「二十五歳」前作の「三月」で季節を明るくしていた情感が、この詩では二十五歳の年齢を明るくしている。季節と年齢という違いがあるだけで、この二篇の情感は全く同じである。

ここにある二十五歳はいかにも豊満で、すべての可能性をみせている。二十五歳の年齢の前に風景

二十五歳の色色の小島は煙つてゐる。

二十五歳の行樂は、寛やかな紫煙草の輪に環わかれてゐる。

二十五歳の懶惰らんだは金色に眠つてゐる。

三

二十五歳の夢よ。二十五歳の夢よ。

どんなに高いだらう。

二十五歳の愛欲はどんなに求めるだらう。

二十五歳の皮膚にどんなに多く罪の軟膏を塗るであらう。

二十五歳の綺羅きらはどんなに華奢はでやかであらう。

二十五歳の好肖このみはどんなに風流であらう。

は開け、万象が熱にうるむように歌っている。行く手に見るもののすべてが明るい「刻」を刻み、その時間さえふくらみを帯びているかのようだ。心の擾乱さえ甘く楽しく、生命の盛りの時を告げている。

これは華美の心情である。耽美的な嗜好である。ナルシズムによつて描かれる命の花である。妖美。耽溺たんにやく。ダンディズムの花模様である。

その華美の心情を綴るのは、「双頬は朱粉に熾え」「糸雨は物憂く匂やかで」「綺羅はどんなに華奢で」「好肖はどんなに風流で」などの言葉である。しかもそれは頹廢たいはい的でなく、全篇が明るい照射を受けている。そのどこかには耽美、頹廢の銜くはいがちらついているが、それでもやはり健康なナルシズムというべきだった。そこには次のような挿話もあった。

浴 場

我我の大多数は生誕した為、余儀なく生きる。余儀なく論議し、熱中し又、快楽を齎る。

ああ、人生の経歴は只倦怠への距離短縮である。

然し、偶然な、氣に染まぬ生存へながら、截然たる『死』が連尻に現はれた時、我我は忽ち、『生』の微温湯の固執者となる。

『温湯』……遊逸の究極痲痺の快感。

其故にこそ、浴場の規模宏壮は、其国の頹爛の度量になるとも云ふ。ボンベイ、羅馬、土耳其、露西亞、又支那、我我の温湯史は如実に、人性の遊惰と虚弱とを物語るだらう。

(感覚と情緒の極度な消耗……)

美麗な大理石と、青玻璃の浴場、色縹子の様な、稜紗の様な朦朧の世界、夫を透して巨大な円柱の列、柑子色の裸体が、夢現の

「後になってからの尾崎（注・喜八）の話では、『この氣障な野郎が』とおもったのだそうだ。結城のかさねに献上の帯、十徳を着て宗匠頭巾という河内山の出来損いのような二十歳の青年が氣障にみえたのはあたり前だろう」（『詩人』）。これは尾崎喜八が、初めて金子光晴に会った時のことである。そんな江戸趣味にも沈湎したのである。

「浴場」華美な表現の作品だけれども、ここには金子光晴の人生論めいたものが、顔をのぞかせている。生れた故に「余儀なく生きる」その人生が倦怠への最短距離だということ、しかし死を恐怖して生の「微温湯の固執者となる」ということ。そういう「浴場の哲理」を考えたということ。

なるほど浴場とはそういうもの